少女と希望のない少年

大河大河

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
少女と希望のない少年

【Ｎコード】
Ｎ３１１９Ｉ

【作者名】
大河大河

【あらすじ】
希望を知らない少年。ただ計算して、生きていく。入院中に出会った少女。どこにでも居るような、しかし、少年には希望を持つ少女に理解ができない。殺意まで抱いていた。そんなある日、友人になろうといわれるが。

一話　普通会わない（合わない）二人。

「ねえ、君ってもうすぐ死ぬんでしょ？」
初めて会って約1分。目の前のベッドに寝ている少女に僕が発した最初の言葉がそれだった。
傍に控えていた看護婦、いや差別の撤廃のために看護士の笑顔が固まる。
それにかまわず僕は続ける。
「第一病棟にいるってことはそういうことだよね。どこが悪いの？怪我はしてないみたいだけど、癌？それとも心臓、いや肺病・・・最近はないかなあ。ああ、僕は風邪を拗らせただけだよ。大丈夫、もう完治したからうつりはしないよ。後3日で退院できるんだ。君はどうなの。第一病棟じゃ無理かな」
ここで、目の前の少女が泣くか、怒るかして僕は自分の病室に連れ戻されると思っていた。
事実、看護婦が間に入ってきた。
しかし、少女は泣きも怒りもしなかった。
それどころか笑っていた。
「ナースの荻原（おぎはら）さん。それじゃあお話できないよ？うん。わたしはもうすぐ死ぬと思うよ。悪いのは心臓。病名は忘れちゃったんだけどね。でも移植しないと死ぬのは確か。退院はむりかな」
僕の質問に一つずつすべて丁寧に答えてくれた。
最初、僕は少女が自棄でも起こしたのかと思った。
でも、少女は楽しげに、無邪気といってもいい位に微笑んでいた。
おかしい。かなりの違和感がある。病院にこんなにも明るいものがあるのだろうか。というかこの世に。
驚いたと言うより、新鮮だった。この気持ち悪さは。
僕は吐き気をこらえながら言う。

「じゃあ、助からないね、当然。日本にいたら特に移植なんてできないよ。海外にでも行ったら」
「それはいいかも。でもお金ないしね。うーん。死ぬのはいやだな」
少女はのんびりと答える。
すべてが、癪に障る。もうすでに少女の顔を直視できなくなっていた。見たら殴ってしまいそうだから。
「そうかな、君の場合は死んだほうがいいと思うよ。生きていてもどうせ病院から出られないんでしょ。いっそ死んじゃえば」
「それは、悲しいね。でも楽しいよ。病院も。まだわたしは生きたいな。あなたも生きたいと思っているんでしょう？」
「なぜ？特にそうは思わないけど。僕は死にたいよ」
これは素直な疑問だ。
「だって、さっきわたしが移植をしないと死んじゃうって言ったとき、あなたは“じゃあ、助からないね”って言ったでしょ。それって生きていること自体助かっているってことじゃないかな。違う？」
迂闊だったのだろうか。
「言葉の綾だよ。死に救いを見出す人だって沢山いるさ」
そこで少女は初めて怒ったようにした。
「だめだよ。そんなことを言ったら。それに言葉の綾って言うのは、言葉を飾って上手に言うことを言うんだよ」
「だから、死ぬってことを飾っただけだよ。学校でやったでしょ。飾られた言葉から真意を見出す事。ああ、まず学校に行けないか。」
「飾っても言葉は言葉。自分の言ったことに責任を持たなきゃだめだよ。武士に二言はない」
僕は、もう我慢ができなかった。
「なら、責任を持とう。自分の言った言葉に。・・・・僕は君を殺すよ」
僕は傍にある棚の上の花瓶を振り上げた。
水と、花が僕と、病室の床と、ベッドと少女に降りかかる。
しかし、少女は恐怖も、嫌悪も感じないように僕を見つめていた。

ああ、気に障る。
僕は花瓶を振り下ろした。

結論を言うと、僕は看護婦に止められた。
その後、第３病棟自分の病室に連れ戻され、１時間ほど怒られた後、夕食をとり、今日は入浴のない日なのでそのまま本を読んでいると、消灯時間が来たので枕もとの電気スタンドをつけてまた本を読んだ。
寒い。この病棟は暖房のききが悪い。
ふと、窓の外から声がした。
まあ、一階だしありえなくはないが、もう他の病棟は消灯時間だし、医者や看護婦だって宿直以外帰る時間だ。
気のせいかと思ったが、今度は窓を叩かれたので仕方なく、カーテンを開けるとそこにはさっきの少女がいた。
真冬、消灯時間、第一病棟の患者がいていいところではない。少し雪だって積もっているし。
騒がれるのも面倒なので、鍵を開けて、ベッドに戻って本を読んだ。
ちなみに読んでいるのはカミュの異邦人。主人公には共感できるし尊敬している。愛読書の一つだ。
少女は、窓を乗り越えようと四苦八苦していた。・・・・そのまま帰ればいいのに。冷気が入って寒い。
しかし、帰ることはなく乗り越えてきた。
少女がベッドの横の丸椅子にすわる。
さて、横の申し訳程度の棚には、文庫本と、水差しと、昼間売店で買ってきたボトルのお茶と、紙コップ。そしてなぜか、カッターナイフ。
カッターに伸ばしかけた手を、強引にお茶とコップに向かわせる。今日は疲れてるからな。
お茶を注いで、病院のベッドに必ずついているあの机（実は取り

外しができる）の上においた。
少女はそれを飲みながら黙っていたので、こっちも黙って本を読む。
しかし、それにも疲れてきたので、一言。
「僕は君が嫌いだ。気持ち悪い。吐き気がする。帰ってください」
では、とまらなかった。
しかし、少女は動じた風もなく
「ああ、寒かった。第一病棟から、歩いてきたから」
パジャマで、そりゃ寒いだろう。丘の斜面に病院があるため途中に階段も在るし。
「何できたんですか？もう、就寝時間ですよ」
「規則を破るのって楽しいじゃない」
「なぜです？」
「自由になった感じがするから。校則とか破ったことないの？」
ため息をつきながら答える。
「規則を破って変わるのは、頭の悪い教師の心象と、内申書だけですよ。自由にはなれません」
「そんなことないと思うけどなあ。そうだ、きてほしいところがあるんだけど」
「いやです」
即答した。
「いいじゃない」
しかし、少女は僕の手を掴むとさっき入ってきた窓に引っ張っていった。
「行くとは言ってないんですが」
窓を乗り越えようと苦労している少女を眺める。
「だから、むりやり、連れて行こうと、しているんじゃない。っと」
このまま、ベッドに戻って本を読むという耐え難い欲求に従おうとしたが、少女はその気配を感じ取ったのか、僕の首筋を窓の向こうから掴んだ。

「・・・・・運動して良いんですか？」
「良くない」
答える気力もなくして、しかたなく、窓を一息で乗り越える。
案の定、すごく寒かった。特にジャージでは。
「で、どこに行くんです」
指されたのは病院の裏の森だった。
今は降っていないが、１２センチほど積もった雪をスリッパで踏みしめると一歩で靴下まで水が入ってきた。
向こうも同じはずだが普通に歩いている。
仕方なくついていく。
「ここだよ」
体感的には十五分つまり、約五分で着いたのは、開けた広場と言うには狭すぎるところだった。
「ここに植えたの」
其の一角を指しながら少女は言った。
「植えた？何をです」
「りんご」
「りんごですか。よくは知りませんが君が生きているうちにりんごが実ることはないと思いますよ」
「そうかもね。でもだめだよ。希望を持たなくちゃ。明日に世界が滅びるとしても、今日、りんごの木をうえるんだ」
「前に流行った映画の台詞ですか。脇役が何人死のうと感動はありませんね。ただ、人が死ぬだけの映画ですか」
「でも、其の映画の本が、あなたの本棚にあったけど？」
「それとこれとは別ですよ。本は、たとえどのようなものでも読むべきです。ですが、本を読んだからといって希望は持てませんよ。僕は脇役のように死にたいです。今すぐにでも」
「だめだよ、死んだら。希望を持たなきゃ」
僕はもう、我慢の限界をふた周りほど超えてしまった。
「なんなんですか、いったい。希望って何ですか！」

「それを、探さなくちゃね。」
「ああ、気に障る。なぜ、君は笑うんです？なぜ、希望と言う希望が抱けるんです？なぜ規則を破ったくらいで自由だと言えるんです？なぜ生きているだけで助かったと言えるんです？なぜ死んだらだめなんです？死ぬくらい自分で決めさせてください！」
少女は笑いながら言う。僕がこんなにも取り乱し、怒っていると言うのに。
「あなたは、自分の言葉に責任を持つと言ったよね」
なぜ、そんなことを聞く。
「ええ、言いましたよ。何なら文章にしてもいいですよ」
「其の必要はないよ。そして、あなたは、わたしを殺すとも言った。つまりこういうこと。わたしを殺すには、あなたが生きている必要がある。わたしが生きている間は、あなたも生き続けなくてはならない。違う？」
「ああ、違わないよ。ただそれは、僕が君をここで殺せばいいだけの話だよ」
僕はそういって、少女の首に手をかけた。
「死ねばいい。君が目障りだ」
強く、締めた。
苦しいはずなのに、少女は笑っていた。
なぜか、力が抜ける。
僕は、この少女を殺せない。そう、感じた。
手を、離した。
「ねえ、友達になろうよ」
少女が発した最初の言葉がそれだった。
どうして、自分を殺そうとした相手にそんなにも無邪気に笑っていられるのだろう。そして、なぜ、僕はいやだといえないんだろう。
ここで、いやといえば、そして、殴れれば、このくだらない茶番が終わるのに。
「・・・・・友人になっても、面白い相手ではありませんよ。約束

なんてすぐ破ります」
僕は、そういってしまった。
「うん。それでいいの。よろしく」
僕は、少女が死ぬまで生きることをここで約束させられたのだと思う。

次の日

さて、次の日、僕はすさまじい疲労感を感じて、眠りこけていたら、朝食の配膳に来た看護婦に叩きおこされた。
特にやることのない病院で7時に起こされても迷惑なだけだが、朝食後は睡眠をとることができるので、まあ、仕方ないとしか言いようがない。
と言っても、一度覚醒してしまったら、寝付けないので、本を読むしかない。これ、読むの3回目だ。
もう、次のページが思い出せるようになった本は記憶力クイズくらいの価値しかない。そして、そんな低俗なものは嫌いだ。
さて、窓の外の雪を被った木々を見る事に専念することにした。
其の時、病室の内線がなり始めた。
一昔前までは、と言っても一週間くらいだが、それまでは職員は医療用とかかれた携帯を持っていたが、やはりペースメーカーなどに考慮した結果だろう、すべての病室に内線が引かれた。
ナースコールとしても使えるそうだが、使ったことはない。それ故取っていいのかどうか迷っていると、鳴り終えた。
ならと思って放っておくと、またなり始めた。
しかたなく、手に取ると、あの少女の声が聞こえた。
切った。
また鳴った。
「朝から一番聞きたくない声をありがとうございます。・・・・・・病室どうしってつながりましたっけ？」
友達と言う、親しく交わっている人。友。友人。朋友。仁賢紀「友達有りて其の意を悟らずして」。教師がしつこくつくれとうるさい関係。裏切。都合のいい関係。そんな関係を結ばされたことを自ら無意識の深層心理から、引っ張り出すために催眠状態になり、さらに、わけのわからないことを口走り始め、昏睡しかけたところで

大きな蛇が出てきて目が覚めた。
　だからと言って、嫌いな人を好きになれるわけがない。
「ううん。つながらないよ。でも一回ナースステーションに繋いで事情を話せばつないでもらえるよ」
　・・・・・。あの、暇なんでしょうか。今、医療従事者って足りないはずでしょう。
「・・・・・で、なんなんですか？」
「暇なら、こっちの病室に来ない？今ね。暇なの」
「そうですか。こっちは忙しくてたまりません。本を読んでるんですね。あと、勉強も。受験生は、忙しいんです」
　まあ、勉強はしないけど、一応、推薦で決まったのが、私立高校の特進で、しかも学費が免除される身としてすこしは勉強のことも頭の片隅に入れておく必要があるだろうから。
「それは、それは。偉いことだなあ。ただ私は君が勉強をしているところを見たことがないがね」
　そういって、ノックもなしに内科の老教授が入ってきた。
「もう、推薦が決まってますからね。私立ですけど。しかし、今日診察があるとは聞いていませんよ」
「言ってないからね。しかし、君、今話しているんだろう。いいのかい？」
「良くないですね」
　受話器を耳にあてると、
「じゃあ、診察が終わった後でね」
　という声が聞こえた。聞いていたらしい。
「それはそうと明後日退院だからね。まず検温から。これを脇に挟んで」
　受話器を置き差し出された体温計を脇に挟みながら、どうやってすぐ帰ろうか最善の理由を考えていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3119i/

少女と希望のない少年

2010年10月11日21時15分発行